

西部開発事業（畑地帯総合土地改良事業）

—緊急発掘調査報告—

眼子田原B遺跡
MANAKODAWARA B SITE

1977

伊那市教育委員会
南信土地改良事務所

序

ここに述べる眼子田原B遺跡の所在する沢渡地区を含めた伊那市西春近地籍はここ数年来大きな開発事業が行なわれつつあります。その主なものとしては、中央高速自動車道路、大規模農道、西部開発に関連する圃場整備事業であります。

このような開発は、時代の要請であります。埋蔵文化財保護にとっては喜ばしい姿ではあります。現代の開発と文化財保護との関係は矛盾する問題が数多く潜んでいますので、早急に解決してもらいたい問題の1つです。

眼子田原B遺跡は、昭和51年度西部開発事業計画に該当しており、発掘調査は昭和51年10月から同年11月上旬にかけて行なわれました。その結果は報告書に述べられているようです。

最後に、発掘調査に際しては、深いご理解をいただいた南信土地改良事務所職員一同、団長、友野良一氏、調査員各位、作業員の皆様に対し、深甚な謝意を表する次第であります。

昭和51年11月25日

伊那市教育委員会

教育長 松 沢 一 美

凡　　例

1. 今回の発掘調査は西部開発に伴なり、県営畠地帯総合土地改良事業で、第4次緊急発掘調査にもとづく報告書とする。
2. この調査は、県営畠地帯総合土地改良事業に伴なり緊急発掘で、国・県・市の補助金のもとに、事業は長野県南信土地改良事務所の委託により、伊那市教育委員会が実施した。
3. 本調査は、昭和51年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし文章記述もできるだけ簡略にし、資料の再検討は、後日の機会にゆずることにした。
4. 本文執筆者は、次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

小池政美、田畠辰雄、荻原茂

◎図版作製者

。遺構および地形

友野良一、小池政美、田畠辰雄、荻原茂

◎土器実測図

友野良一、小池政美、田畠辰雄、荻原茂

◎写真撮影

◎発掘及び遺構

友野良一、小池政美、田畠辰雄

5. 本報告書の編集は主として、伊那市教育委員会があたった。

目 次

序
凡 例
目 次
挿図目次
表 目 次
図版目次

第Ⅰ章 造 構	(1~8)
第1節 住居址	(1~4)
第2節 土 塵	(4~6)
第3節 溝 址	(7~8)
第Ⅱ章 造 物	(9~11)
第1節 土 器	(9~10)
第2節 石 器	(10)
第3節 鉄 器	(11)
第Ⅲ章 ま と め	(12)

挿 図 目 次

第1図	遺構配置図	(1)
第2図	第1号住居址実測図	(2)
第3図	第2号住居址実測図	(3)
第4図	第3号住居址実測図	(4)
第5図	第1号・2号土払実測図	(5)
第6図	第3号・4・5号土払実測図	(5)
第7図	第6号土払実測図	(6)
第8図	第7・8号土払実測図	(6)
第9図	I区溝址実測図	(7)
第10図	II区溝址実測図	(7)
第11図	Ⅲ区溝址実測図	(8)
第12図	土器実測図	(10)
第13図	鐵器実測図	(11)

表 目 次

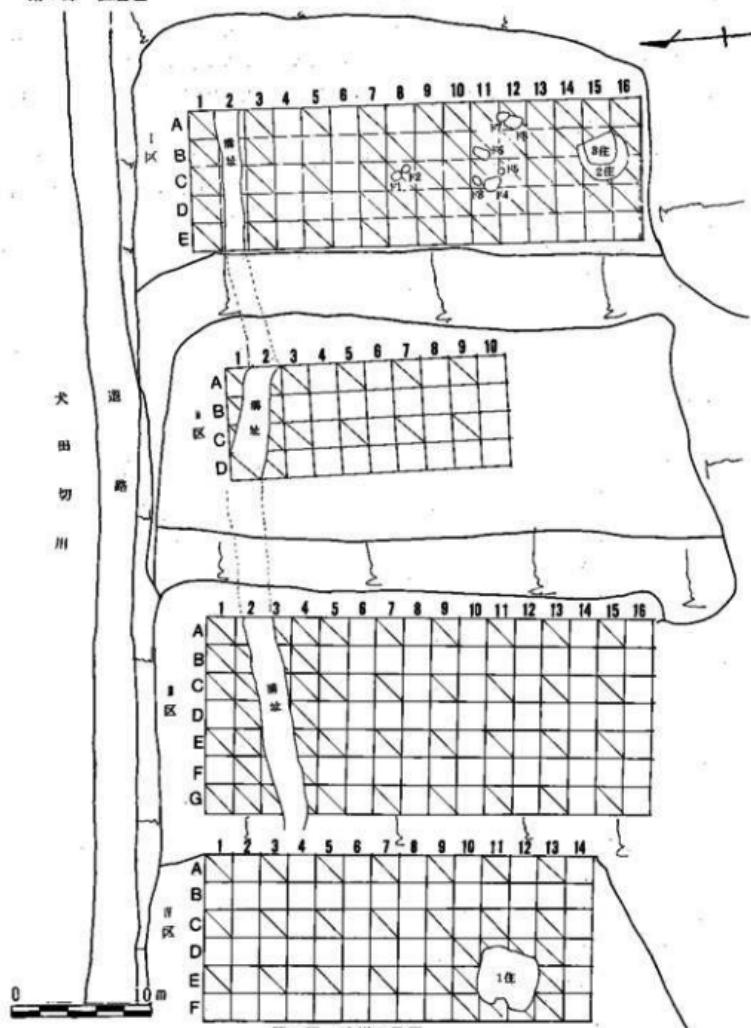
第1表	出土土器の形状一覧表(その1)	(9)
第2表	出土石器の形状一覧表(その1)	(10)

図 版 目 次

図版1	遺跡全景
図版2	遺構
図版3	遺構及び遺物出土状況
図版4	遺構
図版5	遺構
図版6	遺構
図版7	出土土器
図版8	出土石器

第 I 章 遺 構

第1節 住居址



第1図 遺構配図

第1号住居址（第2図、図版2,3）

調査地の西側の第N地区に検出された遺構である。褐色土層よりソフトローム層まで掘り込んだ隅丸方形の堅穴住居址で、その規模は南北3m80cm、東西3m70cm程度である。壁はやや内傾に近い角度で良好、西が高くて、60cm程を測定できる。

床面は大体水平で、堅くたたいた個所が残存していた。また本址は火災にあったとみえて、南側と東北の隅のところどころに炭化した材木が床面に密着して検出された。柱穴は南側に列状に5カ所、西側に列状に3カ所、西壁に密着して2カ所が検出された。北側はわずかに1カ所、東側に2カ所発見されたにすぎなかった。

カマドは西壁の中央よりわずかに北側によった所に位置し、石組粘土カマドであり、形状は西側はややつぼまり、東側はひろがり、やや扇形状になっていた。その規模は南北65cm、東西1m20cm位を算し、カマドに利用されている石は犬田切川産の花崗岩であった。

遺物はカマド内より土器器のカメが出土した。さらに床面上よりわずかに浮いて炭化物に混じって刀子が3点出土した。

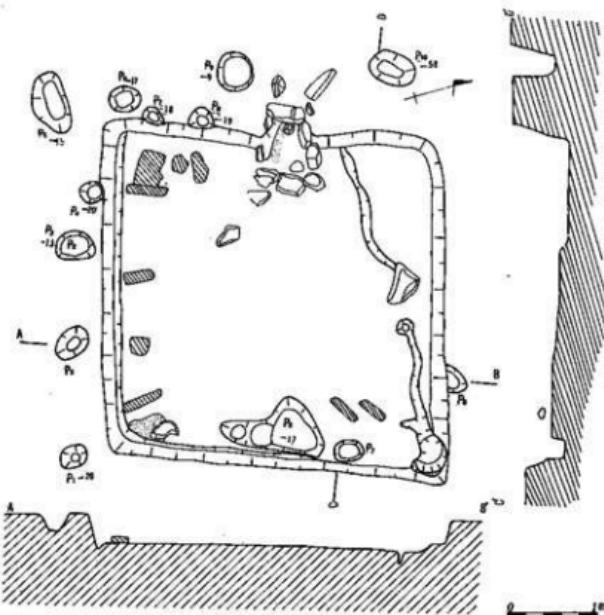
第2号住居址（第3図、図版2,3）

調査地区的東側の第I区の南側に検出された遺構である。表土層面より40cm程下ったソフトローム層面を掘り込み構築された堅穴住居址である。

平面形は南側では不明瞭であった。構築当時は現存していたと思われたが水田造成のときに破壊されたものと思われる。察するに、最初のプランは隅丸方形であったものと確信できる。

規模は南北4m90cm、東西4m65cm程度を測定できた。壁は南東の一辺は欠落していたが、その他は全周し、概して10cm前後を測り、内傾気味であった。

床面はローム層それ自体にタタキ状に構築され部分的には貼床状になっ



第2図 第1号住居址実測図

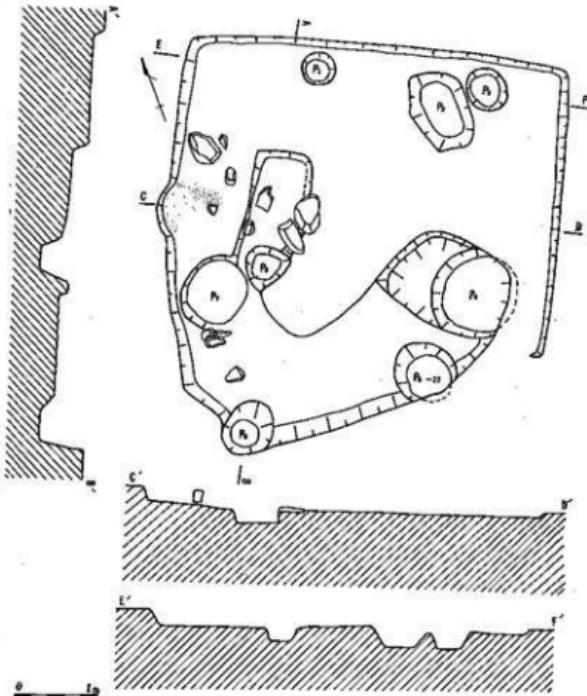
ていたところもあった。硬度はカマド周辺は極めて硬いが、他は軟弱であった。

ピットは8ヵ所発見されたが、柱穴として確実に生きているのはP₁, P₂, P₃, P₄, P₅の5本であり、P₁は形態や場所からして貯蔵穴と思われる。5ヵ所の柱穴の大きさを記してみると次のようになる。P₁の直径は40cm, P₂は50cm, P₃は70cm, P₄は60cm, P₅は45cm位であった。

カマドは構築時は完全な形をとっていたと思われるが、水田造成の折に破壊されたとみて、現在は南北1m30cm、東西1m40cm位の範囲内に8個の变成岩が散在している。おそらく、これらの石がカマドに使用されたものであることは想像に難くない。さらにそれらの西側に焼土が検出された。これがカマドの決手になると思う。

遺物の出土は極めて少量であった。わずかに、土師器、須恵器、灰釉陶器片が出土したのみであった。

よって、本住居址は平安時代に位置づけできると思われる。本住居址より出土した遺物は実測や拓影にするのはなかったので、それらの記載は今回割愛させていただくことにした。



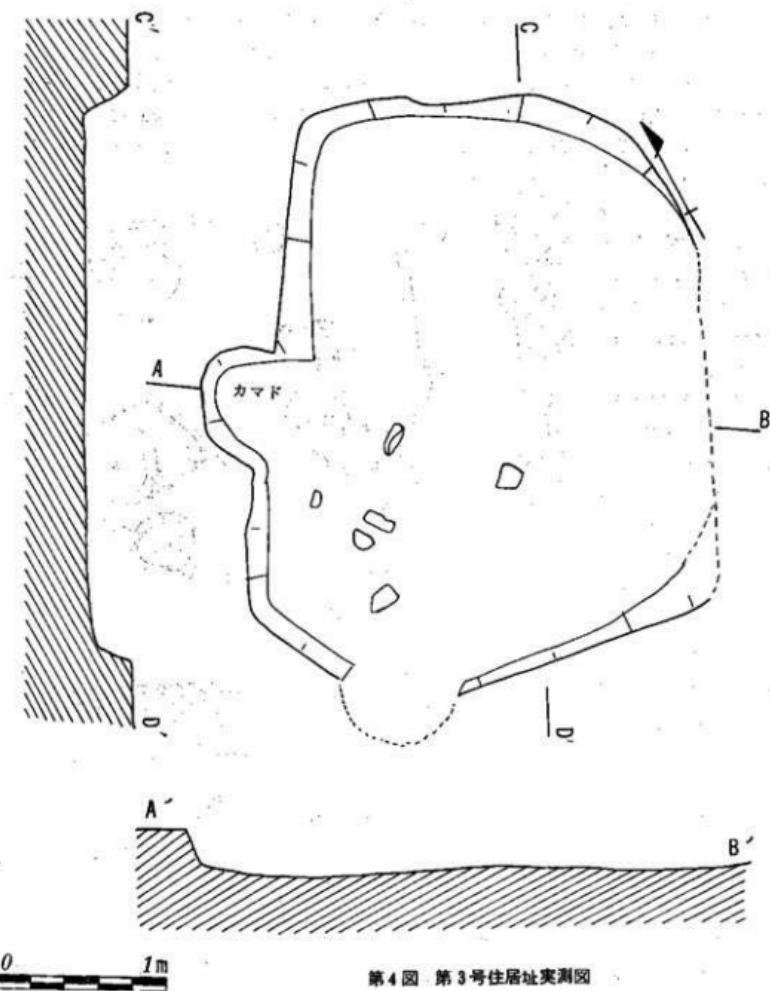
第3図 第2号住居址実測図

第3号住居址（第4図、図版2, 3）

本址は第2号住居址の貼り床を取り除いた下に発見されたものであった。その規模は南北3m40cm、東西は推定2m50cm程度である。壁高は内傾や内寄し、20~40cm位の範囲内に含まれた。壁面の状態は浅いわりには良好であった。床面は極めて固く、ソフトローム層をたたいてあり、大蛇、水平となっていた。

床面上には住居址に必要な柱穴の存在はなかった。わずかに西側の突き出した部分にカマドに使用したらしい粘土のかたまりが存在していた。遺物は何も出土しなかった。

（小池政美）



第4図 第3号住居址実測図

第2節 土 坂

第1号土坂 (第5図、図版4)

発掘地区の第1区C8に位置し、その規模は南北1m30cm、東西75cm、深さ5~30cm程の長円形

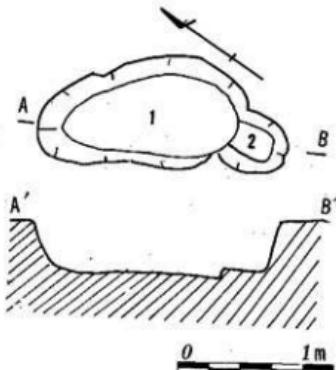
状を呈し、ローム層を掘り込んでいる。覆土は褐色土であった。壁は内縁が強く、その床面は水平で軟弱気味であった。

遺物は何も出土しなかった。ただし、覆土内よりは少量の炭化物の検出をみた。

第2号土塗（第5図、図版4）

第1号土塗の南壁に密着したところに位置した土塗である。規模は南北40cm、東西40cm程度であり、そのプランは円形を呈し、むしろビット状のものである。壁面は内傾気味であって、その深さは30cm程度である。

床面は軟弱で、水平であった。北側で、第1号土塗に切られている。遺物は何も出土しなかった。なかより少量の炭化物の出土がみられた。



第5図 第1号・2号土塗実測図

第3号土塗（第6図、図版4）

表土層面より35cm程下ったソフトローム層面を掘り込んだ土塗である。平面プランは円形で、規模は南北60cm、東西75cmを測定できる。壁は垂直に近く、壁高は30cm前後を計える。床面はほぼ水平で、わずかにたたきががあった。

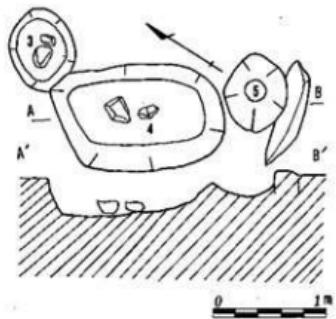
床面上の石は花崗岩であった。覆土内より遺物の出土はなかったが、わずかな焼土と炭化物を検出し、遺構であることが確認できた。

第4号土塗（第6図、図版4）

第3号土塗の南壁を切つて構築された土塗である。表土層面より40cm程下ったローム層面を掘り込み、南北1m50cm、東西95cm程の規模を有し、長円形プランを呈している。

壁は北側は内縁し、南側は内傾しておる。高さは20~30cmを測り、南側は凹凸が顕著であった。床面はたたきらしきものは確認できず、わずかに凹凸があった。床面中央部の石は花崗岩であった。

覆土内より多量の焼土と炭化物の検出はみたが、遺物の出土は何もなかった。本土塗は8カ所のうちで最も土塗らしい土塗はこれが唯一のものであろう



第6図 第3号・4号・5号土塗実測図

第5号土括 (第6図、図版4)

ローム層を掘り込んで構築された土括で、その規模は南北55cm、東西60cmである。プランは円形を呈している。壁高は10数cmを測定できる。壁面状態は内傾気味である。床面はわずかにたたきになってしまっており、中央部がすりばら状に低くなっている。南側の壁上面に変成岩が東西にあった。

覆土内より遺物は全く出土しなかったが、微量の炭化物を検出した。

第6号土括 (第7図、図版5)

第5号土括と第7号土括とはさまれて検出された土括で南北75cm、東西1m18cm程の長円形プランを呈している深さは60cm位で、ローム層を掘り込んでいる。プランの中央部を東西に幅10cm位フラットに残された部分があった。

壁面は袋状で内傾気味を呈し、凹凸がわずかに認められたたきは存在しなかった。床面はローム層のわずかなたたきであり、覆土中より少量の炭化物が検出された。遺物は何も出土しなかった。

第7号土括 (第8図、図版5)

第I区の東端近くに発見された土括である。南壁で第8号土括を切ってつくられている。南北1m10cm、東西85cm位の角張った円形プランである。壁高は20~30cm位あり、片面は内傾が、片面は内壁が強くなっている。

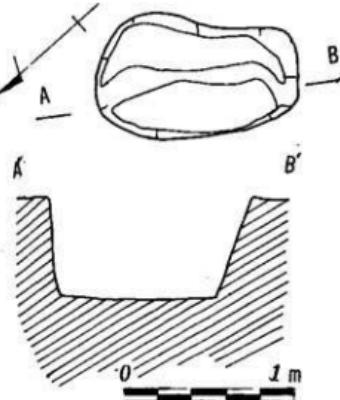
床面はローム層中につくられ、かいたたきになっており、わずかに中央部附近が高くはなっているが、全般的には大般水平であった。覆土内より少量の炭化物は出土したが、遺物は何も見あたらなかった。

第8号土括 (第8図、図版5)

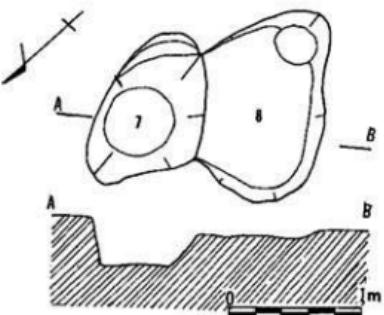
本土括は南側が第7号土括に切られるようなかっこりで検出された土括である。切られているために全般的なプランは不明ではあるが、想像するに、隅丸方形に近いかっこをとっていると思われる。壁高はわずかに数cmと思われ、軟弱であった。

床面は多少の凹凸が認められ、わずかにたたきになっていた。覆土内より少量の炭化物の検出は認められたが、遺物の確認は何もなかった。

(小池政美)



第7図 第6号土括実測図



第8図 第7号・8号土括実測図

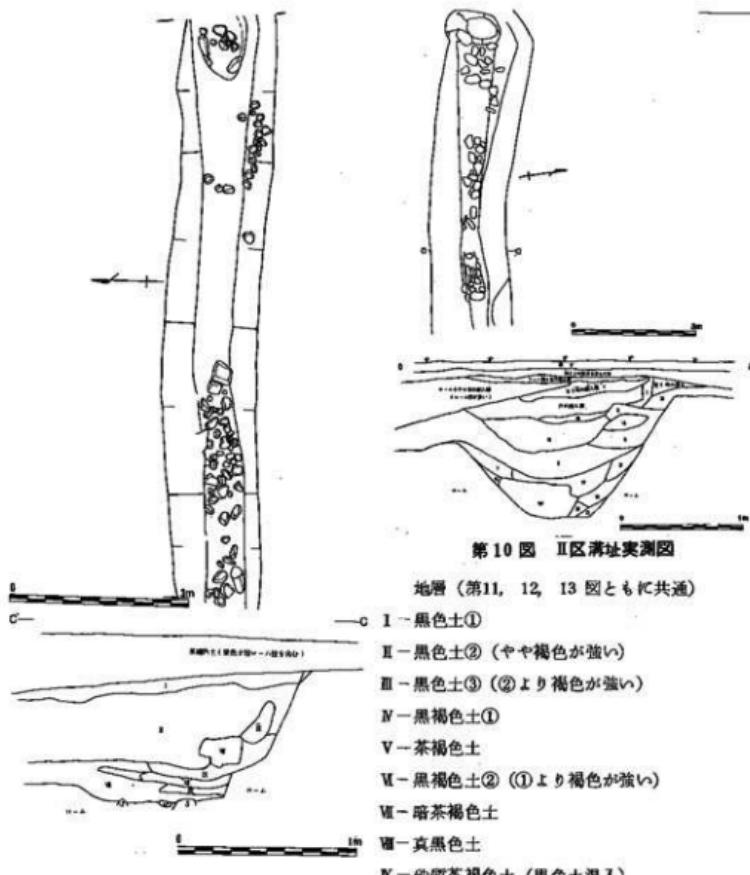
第3節 溝 壴

溝壠（第9、10、11図、図版6）

遺跡内I区の北端から発見され、やや北に寄りながらII区、III区と続いている。

溝壠の巾は150cm前後であり、断面V字状を呈している。河床にはコブシ大から、かなり大きめの石までいっており、砂も多量に堆積している。

I区東端（溝壠はそれより東に続くものと思われる）は一段底く、不整な長円形を呈しており、



人頭大の石が入り込んでいて、土括状となっている。

またI区の溝址の東側に、大きさが17cm前後の石が、南側の壁面に貼りつけたようになり、それが150cmの長さにおよんでいる。

I区の溝址の深さは7~80cmくらいであった。

II区の溝址はI区から続くものであるが、検出面からの深さはI区のそれよりも深くなっている。溝巾も同様に広くなっている。

溝の断面はI区同様V字状を呈しているが、南側の壁が、北側の壁よりも高く、傾斜も北側壁より、南側壁の方が強くなっている。河床には人頭大の石が、砂とともににはいっている。

II区の溝址の巾は、180~200cm、深さは、110cm前後を計る。

III区の溝址もI、II区から続いているもので、方向をやや南に向けながら、これより西へ続いていると思われる。

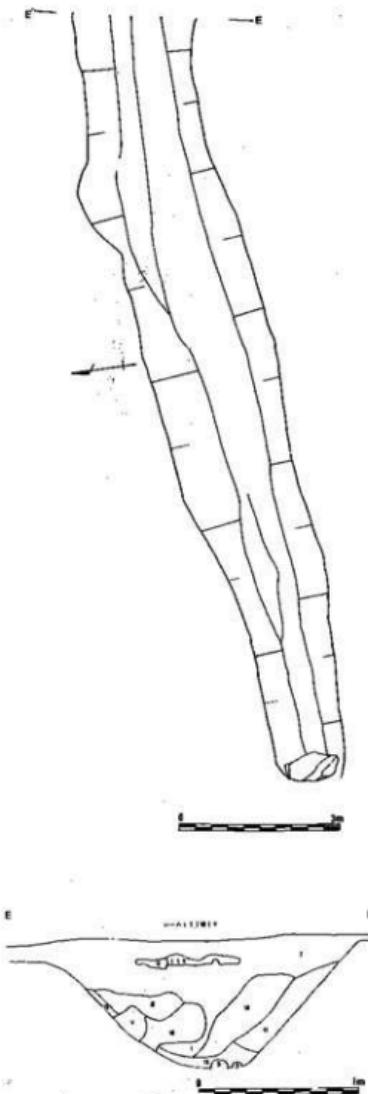
III区の西端に近づくと、溝巾が急に細くなり、本溝址もここで消滅するかとも思われたが、溝の深さは、浅くなるものの、40~50cm前後はある。65×45cm大の石が、溝址内にいっぱいにはいっている。

当区の溝址の河床の傾斜は、I、II区に比べてかなり急なものとなっている。

溝址の巾は、東側で240cm~210cm、西側の細くなる部分で、130cm前後を、深さは、浅いところで、40cmから深いところで75~80cmを計る。

I~III区の溝址とともに擾土は、第12図の下にある通りで、下層に行くほど、層序は混亂している。

(田畠辰雄)



第11図 第III区溝址実測図

第Ⅱ章 遺物

第1節 土器

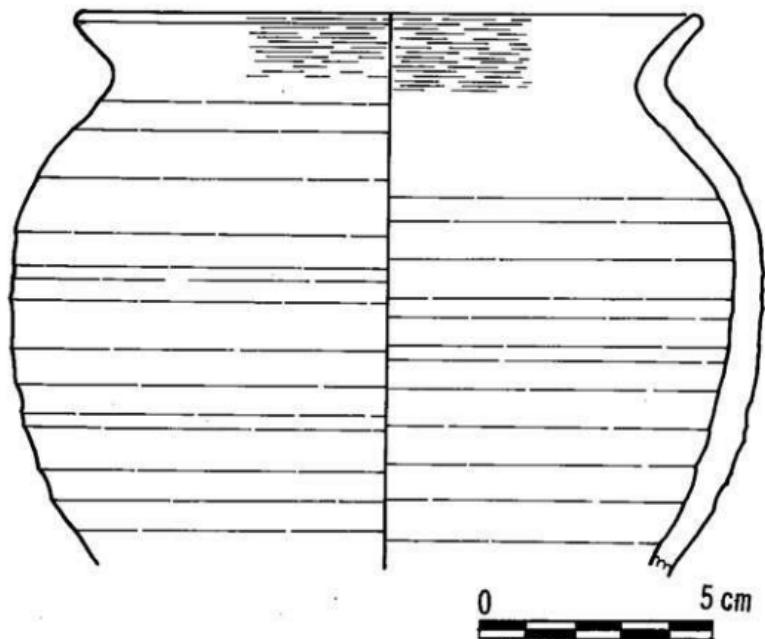
土器の説明は表を作成し、一見のもとに理解できるようにした。一覧表の見方について項目別に簡単な内容説明を附記しておくこととする。胎土、保存状態、色調についての記述は明らかなる基準によったものではなく、筆者の主觀によるものである。

図版	番号	胎土	保存状態	色調	厚さ	文様の特徴	備考
7	1	多量の雲母	中位	明褐色	8	繩文	グリット
"	2	少量の長石	中位	黒褐色	7	沈線	"
"	3	"	"	"	5	"	"
"	4	多量の雲母	"	"	7	沈線	"
"	5	"	"	黒褐色	5	爪形文、翫目 隆帯、沈線	"
"	6	少量の雲母	中位	"	6	爪形文、沈線、刻目	グリット 口縁部
"	7	多量の長石	不良	赤明褐色	7	沈線、刻目	グリット
"	8	少量の長石	中位	明褐色	7	刺突文 縦文、沈線	グリット
"	9	少量の雲母	良好	明褐色	6	沈線、刻目	グリット 口縁部
"	10	"	中位	赤褐色	7	刻目、沈線	"
"	11	少量の長石	良好	茶褐色	6	沈線	グリット
"	12	多量の長石	不良	明褐色	7	沈線	グリット
"	13	少量の長石	"	茶褐色	7	"	"
"	14	多量の長石	良好	赤褐色	6	花瓶 円形沈線文	グリット 口縁部
"	15	多量の雲母	"	"	7	花瓶 内面に擦痕	"

第1表 出出土器の形状一覧表（その1）

第12図の遺物は第1号住居址のカマド内より出土した土器の小形壺である。色調は外面赤褐色、内面黒褐色を呈し、微密な胎土の状態であった。外面は、二次的な焼成痕が顕著な面があった。口径13.0cm、胴部最大径15.8cm、最大径部は、胴部上半にあり、全体に丸い感じの壺である。薄手の土器で、器面の整形技法は、口唇から頸部にかけて内外面ともに横ナデ、胴部はロクロによる水引整形痕が内外面ともに顕著である。

（田畠辰雄）



第12図 土器実測図

第2節 石 器

石器の説明は表を用いることとする。表の項目は図版、番号、名称、器形、石質、備考である。

図版	番号	名 称	器 形	石 質	備 考
8	1	砥 石		油性頁岩	2号住居址
#	2	打製石斧	短冊形	硬砂岩	グリット
#	3	#	#		#
#	4	#	#		#
#	5	磨製石斧	乳棒状	蛇紋岩	#
#	6	石 錐		硬砂岩	#
#	7	#		蛇紋岩	#
#	8	磨 石		硬砂岩	#
#	9	#		#	#

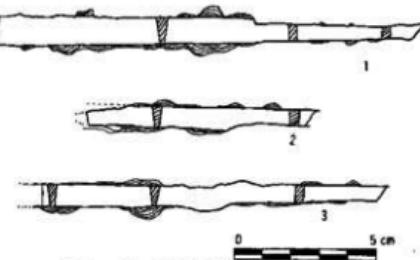
第2表 出土石器の形状一覧表（その1）

第3節 鉄 器

第13図に記された3個の鉄器は全て刀子である。第1号住居址の東壁近くの床面に密着して出土したものである。1は現長15.7cm、2は8.2cm、3は12.6cmである。(1~3)はいずれも柄の方は破損してしまっている。(1,3)は鋒者の残り状態は極めて良好であった。

刀子の腐蝕状態はかなり良好な状態であり、割合に刀身はしっかりとていた。鋒者は二つとも割合に鋭く、この部分には全く腐蝕の状態が見当らなかつた。

刃先は割合になめらかであり、刀子としては上伊那地方としては、かなり優品のなかにふくまれるものと思われる。鉄は当然、時代からして砂鉄を使用したものと思われる。(小池政美)



第13図 鉄器実測図

第Ⅲ章 まとめ

本遺跡の調査は、伊那市西春近沢渡地輪では初めてであった。そのために、今まで、未知な点が、多かっただけに、その解明に役立つものと期待して、調査にとりかかった。発掘した成果をここに列記すると、住居址3軒、土塹8基、溝状遺構1である。住居址3軒の内訳は平安時代3軒である。各遺構についての本格的な考察は時間的余裕がないので、ここではいくつかの問題点を記し、所見を附しておきたい。

眼子田原B遺跡は既述したように河岸段丘上の突端部地域。いわゆる、最も自然災害については安定した地帯、また、日照時間についても長い地帯、さらに段丘崖より出る湧水の豊富な地帯、これらの三つの自然的条件を備えており、遺跡地存在としては極めて濃厚な場所であった。平安時代関係の検出遺構は竪穴住居址が3軒あり、これらは全て関東地方の国分寺に比定されるものである。隅丸方形を呈し、カマドは西壁寄り中央部附近に石を並べ、その周囲に粘土をつけた石組粘土カマドであった。これらの3軒の住居址は平安時代中期初頭頃に位置づけられそうである。このころには灰釉陶器の存在が活発化してくるのに、本遺跡では一点も出土していない点は何か注目に値するだろう。しかし、ロクロの顯著な小型甕の出土からして、前述した時期に相違ないことは確証できよう。

次に土塹について述べてみようと思う。土塹は8カ所発見されたが、全て、遺物の出土は何もなかったので、時代決定は不可能である。

溝址は水田の地場層の下に検出された遺構である。現在、水田に利用している眼子田井は遺跡地から西方へ3km程登った地点で、犬田切川より引き水している。この井は江戸時代末期に開らかれたものである。今回、発見されたのは、どうも井の可能性が強い、おそらく、眼子田井の前時代の井であったのではなかろうか。

遺物は土器・石器・鉄器が出土している。土器については縄文時代中期のものが最も多く、そのなかでも編年で言う、梨久保式が多かった。石器は砥石、打製石斧、磨製石斧、石錐、磨石などの種類で、石質は油性頁岩、硬砂岩、蛇紋岩であった。

(小池政美)

図 版



電東より遺跡地を眺む



西側より遺跡を眺む



第1号住居址



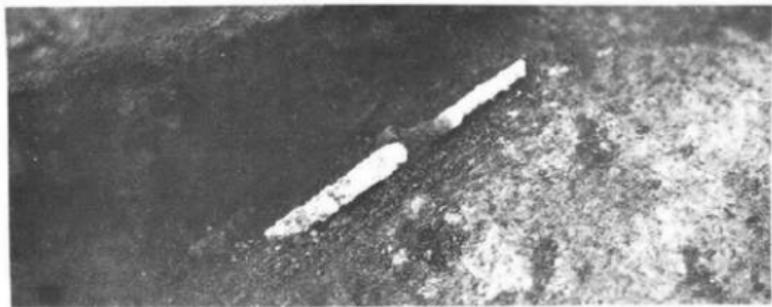
第2・3号住居址



第1号住居址カマド



第2・5号住居址カマド

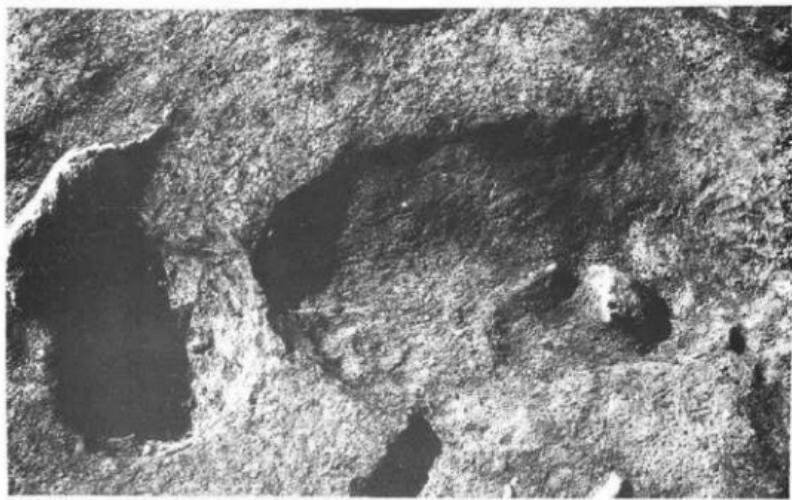


刀子出土状況（第1号住居址）

図版5 遺構及び遺物出土状況



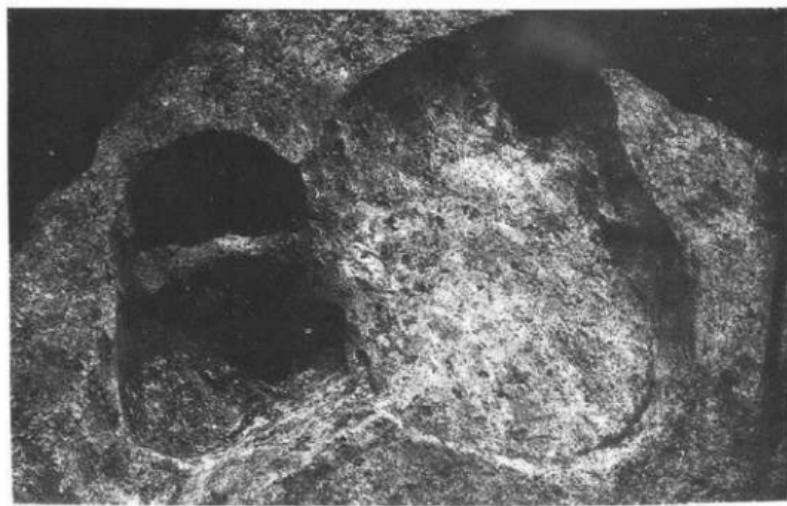
第1号・2号土坑



第3号・4号・5号土坑



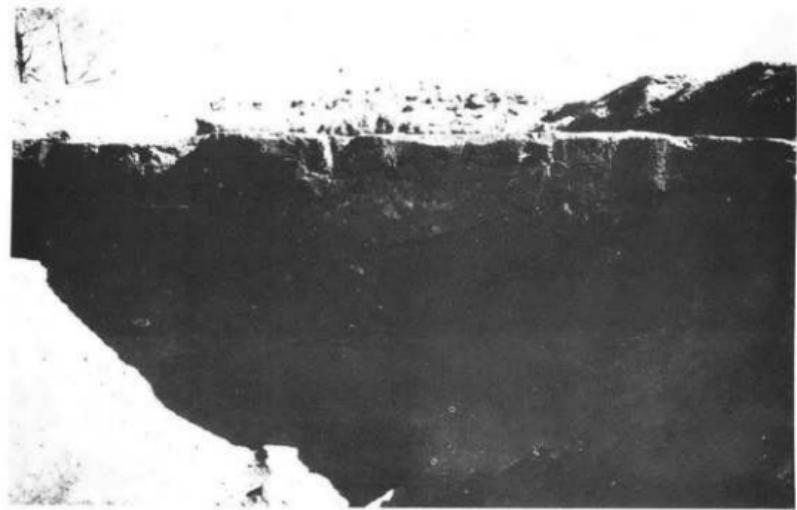
第6号土块



第7号・8号土块

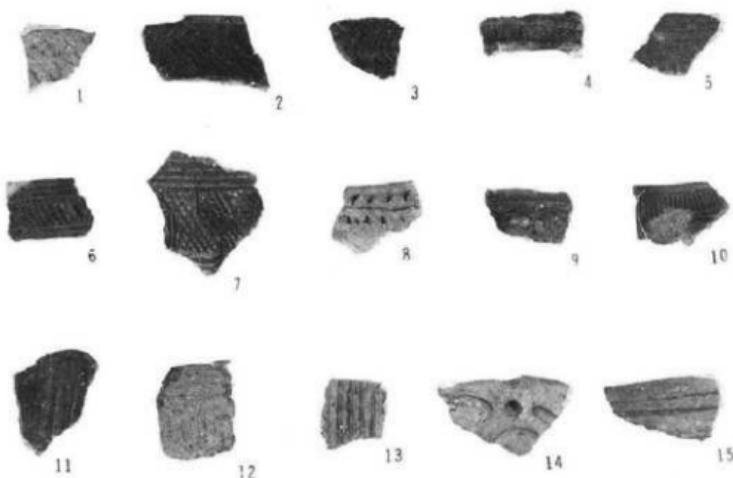


溝 址



溝址断面図

図版 6 遺 構



图版7 出土土器



图版8 出土石器

眼子田原 B 遺跡

——緊急発掘調査報告——

昭和52年3月15日 印刷

昭和52年3月25日 発行

発行所 長野県伊那市教育委員会

印刷所 長野県伊那市美篠上大島

みすず創美社

